

飛鳥寺塔心礎出土刀子

1 はじめに

奈文研は昭和32年の飛鳥寺跡第3次調査で塔基壇を発掘調査した¹⁾。基壇中心部の現地表下60cmで建久年間に再埋納された舍利容器と石櫃を、さらに現地表下2.7mで心礎と推古天皇元年(593)の埋納品と考えられる遺物を検出した。心礎上面の周縁には埋納当初の位置を保つとみられる挂甲、蛇行状鉄器などが残っていた。立柱前に舍利孔に納めた舍利荘厳具に対し、これら心礎周縁の品々は立柱後に置いた奉獻品と考えられる。ほかに心礎上面では、建久の埋土とされる炭に混じって耳環、金・銀の延板・小粒、玉類、刀子などが散乱していた。刀子はすべて心礎上面の採集品と報告されている。これらについては建久8年(1197)に掘り出された時の取りこぼしと考えられており、刀子が舍利孔に納められていたのか、心礎上面に置かれていたのかは知りえない。

(石橋茂登)

2 出土刀子について

既報告では「ほぼ形を知ることのできるもの7個、その他破片5個を算える(31頁)」とされたが、再整理の結果、15点の鉄製刀子片と刀子装具の可能性のある金銅製品2点を確認した(図16・表7)。全形のわかるものは少ないが、刀身長15cm以上の大型品と10~15cmの中型品(いずれも刃幅1cm以上)、10cm未満の小型品(刃幅1cm未満)にわけることができる。

大型品は1と2の2点で、刃幅や厚さからみて同一個体であろう。柄は遺存しない。鞘は木製二枚合わせで表面に漆状の塗膜が認められる。

中型品は5口確認され、直柄と曲柄がある(3~8)。いずれも両関式だが、3以外の刃側は直角関ではなくナデ関である。柄材は6のみ鹿角製で、ほかは木製一本造り。茎に目釘孔をもつもの(6・7)や柄縁に別材の木製装具を嵌めるもの(5)もある²⁾。鞘は木製二枚合わせのほかに皮革製³⁾があり、7は切先側の表裏に獣毛とみられる繊維質が付着しており毛皮製袋鞘であった可能性が高い。

小型品は少なくとも3口はあったとみられ、いずれも直柄である(9~13)。外装が遺存するものはいずれも木製で、柄は一本造り、鞘は二枚合わせである。9は、両関式で柄縁に銀製装具を嵌める。銀製装具は断面コ字状の薄い銀板を曲げたもので、佩裏側に銀板の両端を重ね合わせた痕が残る。蛍光X線分析の結果、ほぼ純銀で銅を微量含むことが確認された(降幡順子による)。10と11、12と13はそれぞれ幅や厚さなどからみて同一個体の可能性が高い。

14と15は小型品ないし中型品とみられる柄の破片で、上述のものとは別個体とみられる。15は唯一、柄を二枚合わせでつくる。16と17は金銅製品で、形態的特徴から刀子装具と判断し、ここに報告する。16は厚さ1.0mmの銅板を断面菱形に成形し、表面を鍍金する。17にともなう鞘口装具とみられる。17は厚さ0.8mmの銅板を先端をすばめながら筒状に成形し、表面を鍍金する。土圧によって大きくつぶれている。鞘金具とみられる。なお、これらにともなう刀子本体は出土していない。

以上を整理すると、飛鳥寺塔心礎には少なくとも11口の刀子が埋納されたものとみられる。(諫早直人)

3 マイクロフォーカスX線CTによる調査

飛鳥寺塔心礎に埋納された刀子の構造を把握するために、6点の刀子片についてマイクロフォーカスX線CT撮影をおこなった。本稿ではそのうち、典型的な特徴の表れている4例を紹介する。撮影に用いた装置は、島津製作所SMX-CT100-Dで、本機種ではX線源に焦点寸法5 μ mの密閉管を採用している。撮像条件は、管電圧96kV・管電流104 μ Aで、平面撮影においてはスライス厚0.35mm・撮像視野径約24mmの範囲を2048 \times 2048画素で、また三次元撮影においては撮像視野径約24mm・軸方向約8mmの範囲を1024 \times 1024 \times 337画素でそれぞれ構成している。したがって、平面像の画素当量長は約12 μ m、立体像のボクセル当量長は約24 μ mとなる。本稿で紹介する前3例は平面断層画像であり、最後の1例のみ立体断層画像となる(図17)。

資料2をみると、ヒノキと思われる針葉樹材の鞘に刀身が収まっている様子が描写されている。木質が良好に遺存している上面付近には、表面に漆が塗布されている様子を見て取ることができる。なお筆者は、X線CT画

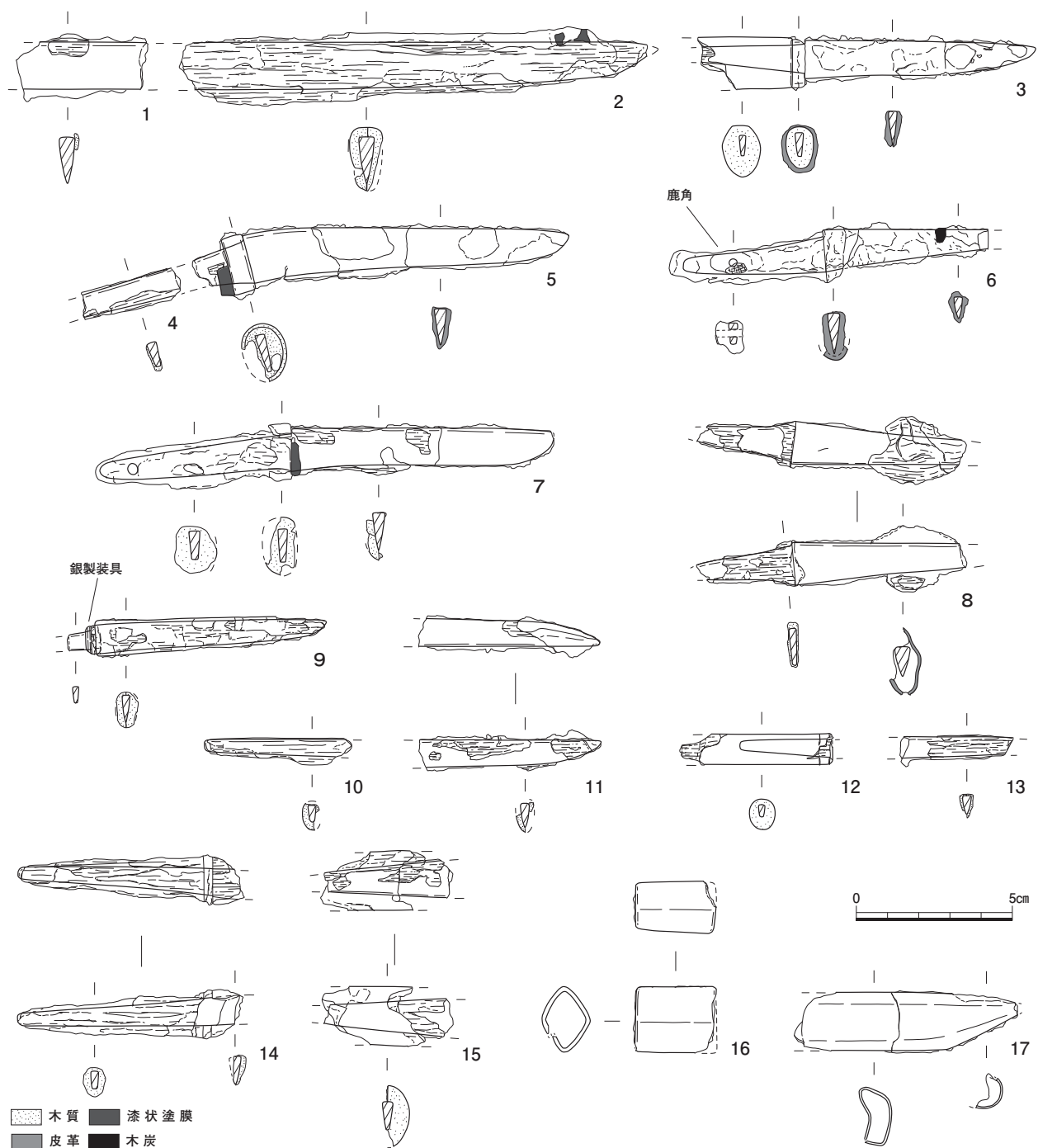


図16 刀子実測図 1:2

像において表面の白く描写されている部分を漆層と判断する根拠として、様々な保存状況の出土漆器を複数撮像し、いずれも今回と同様な撮像条件では、表面に漆層が明瞭に描写されることをあらかじめ確認している。

資料15は、二枚合わせの柄の片側のみが遺存するものである。資料2同様、ヒノキと思われる針葉樹材で、木質が良好に遺存している左側面には、表面に漆が塗布されているのを見て取ることができる。また、茎の上下には、二枚合わせの接合面がはっきりと確認できる。柄断

面の長軸方向19mmの中に52層の年輪が含まれていて、平均年輪幅0.37mmとたいへん緻密な材が用いられていた(一般的なヒノキの年輪幅は、0.8mm程度であることが多い)。

資料8は、毛皮製袋鞘と観察されているものである。前2例の木材の鞘とはまったく異質な構造であることがわかる。筆者は、毛皮に関する知識を持ち合わせていないので、専門家からのご指摘をお待ちしたい。

資料6は、鹿角製の柄とされるもので、本稿ではこれのみ三次元撮影で情報取得している。鹿角特有の構造と

表7 飛鳥寺塔心礎出土刀子計測値

番号	種 類	全長	刀身長	茎長	刃幅	開	鞘材	柄材	備 考	既報告
1	刀子	4.2	(4.2)	—	(1.5)	—	木	—	2と同一個体か	—
2	刀子	14.9	(14.9)	—	(1.5)	—	木(二)	—	鞘に漆状の塗膜	17-7
3	刀子	10.8	7.4	(3.3)	1.2	両開式	皮革?	木(一)	呑口式か。柄に漆状の塗膜	17-1
4	刀子	3.3	—	(3.3)	—	—	—	木(一)	5と同一個体か	—
5	刀子	12.0	10.5	(1.8)	1.6	両開式*	皮革(袋)	木(一)	木製柄縁装具。柄・鞘に漆状の塗膜	17-6
6	刀子	10.3	(5.3)	4.5	1.4	両開式*	皮革?	鹿角	柄に目釘。柄外面に織物付着。鞘口別材か	17-2
7	刀子	14.7	8.4	6.2	1.4	両開式*	木(二)	木(一)	柄に目釘。柄・鞘に漆状の塗膜	17-5
8	刀子	8.6	(6.1)	(3.1)	1.4	両開式*	毛皮(袋)	木(一)	—	17-3
9	刀子	8.3	7.5	(0.8)	0.9	両開式	木(二)	—	銀製柄縁装具。鞘に漆状の塗膜。鞘口別材か	17-4
10	刀子	4.7	—	(4.7)	—	—	—	木(一)	11と同一個体か	—
11	刀子	5.8	(5.8)	—	(0.9)	—	木(二)	—	—	—
12	刀子	4.9	—	2.9	—	—	—	木(一)	柄に漆状の塗膜。13と同一個体か	—
13	刀子	3.6	(3.6)	—	(0.7)	—	木(二)	—	—	—
14	刀子	7.3	(1.0)	6.2	0.9	—	木(二)	木(一)	鞘に漆状の塗膜。柄縁別材か	—
15	刀子	4.2	—	(4.1)	—	—	—	木(二)	柄に漆状の塗膜	—
16	刀子装具	全長2.6cm、幅2.0cm、厚さ1.5cm							金銅製。鞘口装具か	—
17	刀子装具	全長7.1cm、幅1.8cm、厚さ1.1cm							金銅製。鞘金具か	—

*数値の単位はcm。()は残存値。両開式で刃側がナデ開のものには*を付した。(二)：二枚合わせ、(袋)：袋鞘、(一)：一本造り

して、柄の表面付近は緻密質で、茎付近のみ長軸方向に沿って海綿質である様子が見て取れる。(大河内隆之)

4 類例との比較

古墳副葬品 刀身と外装(拵)にわけてみる。まず刀身形態については、渡邊可奈子によって奈良県内の古墳出土品が集成され、おおよその変遷があらわとされている⁴⁾。飛鳥寺の刀子は両開式が主体とみられること、全長や茎長などからみて同時期(古墳時代後期後半)の古墳副葬品との間に大きな違いは認めえない。

次いで外装についてみる。飛鳥寺の刀子は、木製一本造りの柄に、木製二枚合わせ鞘ないし皮革製袋鞘という組み合わせを基本とする。どの破片にも何らかの有機質が付着しており、すべて外装をつけたまま埋納されたとみられる。また肉眼観察およびマイクロフォーカスX線CT調査の結果、多くの外装に漆とみられる塗膜層が確認された。古墳出土刀子の外装については金属装など遺存状態のよいものについては注意されてきたものの、全体的な変遷についてはまだあきらかとなっていない。ここでは木製二枚合わせ鞘に刀剣生産との関連を想定できること、石製模造品などから遅くとも古墳時代前期後半には出現していたとみられる⁵⁾皮革製袋鞘が後期後半にも一定数存在したことを確認するととどめておく。

飛鳥寺唯一の装飾刀子である資料9は藤村翔の分類⁶⁾によれば、部分装2式に該当する。氏によれば古墳時代後期後半は日本列島で装飾刀子の生産が始まり、かつ副葬がもっとも盛行する時期とされ、藤ノ木古墳など飛鳥寺に前後して築造された有力古墳からは装飾大刀と意匠を共有する装飾刀子が複数出土している。それらに比べると、飛鳥寺の刀子に占める装飾刀子の割合は限定的であり、かつ装飾も簡素であることは否めない。(諫早)

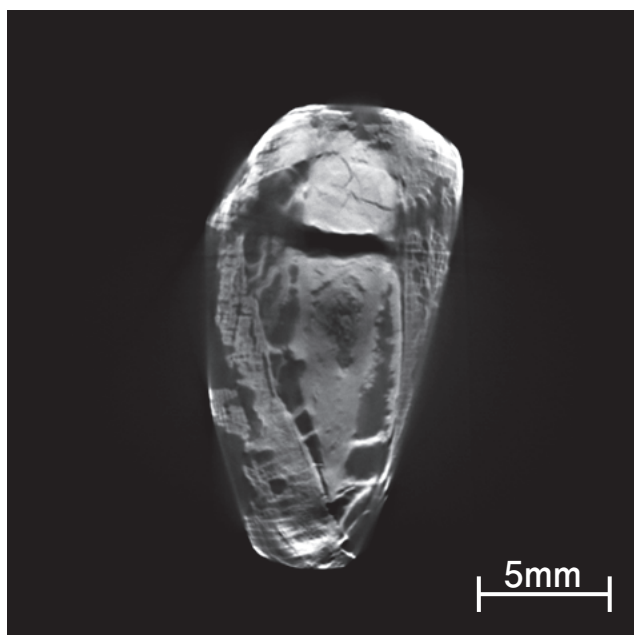
寺院出土品 塔心礎に刀子を埋納した例はほとんどな

いが、尼寺廃寺では心礎柱座から漆塗木製鞘で銀製装具をもつ小型の装飾刀子が1口出土した。また、同じ塔基壇上の土坑に大型刀子1口が埋納されていた。奈良時代の寺院では鎮壇具に刀子をとまう事例が知られる。坂田寺の仏堂SB150の須弥壇鎮壇具は背開式の中型刀子を1口含む。柄のみ木質が残り、金属製装具はない。東大寺金堂鎮壇具には刀子6口以上の残欠がある。いずれも両開式の小型刀子で、金属製装具をもつものもある。鞘は木製二枚合わせとみられるもののほかに、皮革製とみられるものが報告されている。興福寺金堂鎮壇具(東京国立博物館所蔵)の刀子1口は、鞘に金銅製の華麗な装飾をつけ、水晶玉を嵌める豪華なものである。鞘口には木葉形の環付金具がついている。以上をまとめると、寺院の塔心礎や須弥壇に埋納される刀子は、概ね飛鳥寺と同程度の小型から中型の比較的簡素なものが多い。装飾刀子はいずれも藤村の部分装2式にあたる。複数埋納例は形態に多様性がある。飛鳥寺で一定量確認された曲柄は、正倉院にもみられるが、今回取り上げた寺院からは出土していない。興福寺金堂鎮壇具の装飾刀子は華麗で稀少な例である。

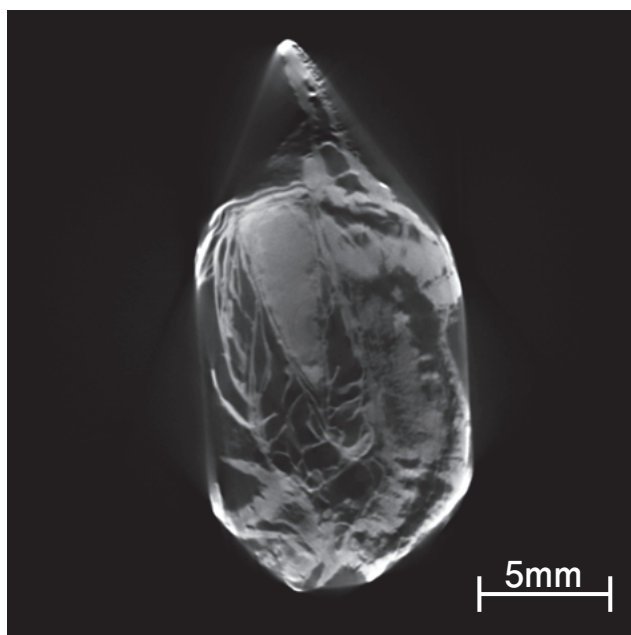
百済の事例もみておく。飛鳥寺に先行して577年に創建された扶余の王興寺では、木塔心礎の舍利孔周辺に大型1口、中型7口の刀子が埋納されていた。いずれも直柄。柄・鞘ともに木製とみられ、金属製装具はもたない。一方、益山弥勒寺西石塔の舍利孔に639年銘の金製舍利奉安記などとともに納められた7口の刀子は、直柄と曲柄があり、金属製の華麗な外装をもつ。百済寺院でも複数埋納品の形態は多様であること、簡素な刀子と豪華な装飾刀子の両方を用いていたことがわかる。(石橋)

5 おわりに

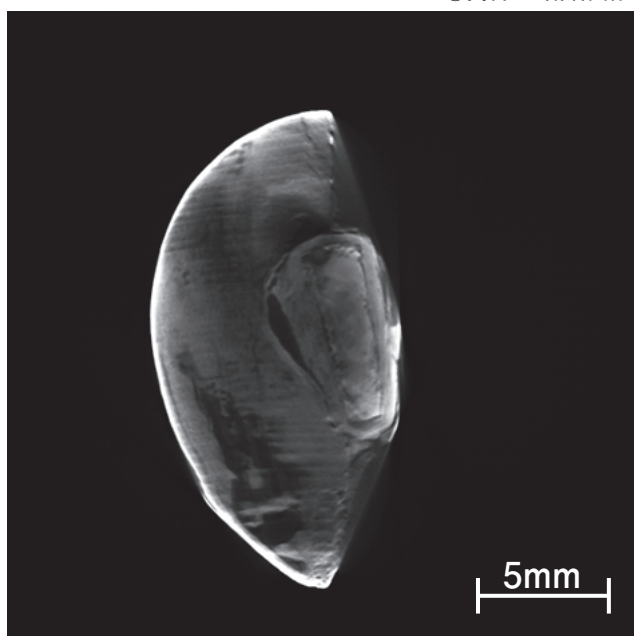
本稿では飛鳥寺塔心礎に埋納された刀子の全容をあき



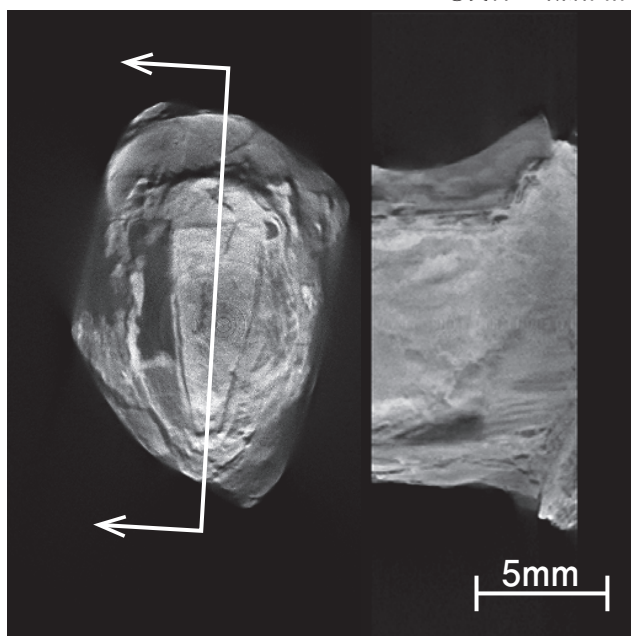
①資料2の断層画像



③資料8の断層画像



②資料15の断層画像



④資料6の断層画像

図17 刀子のマイクロフォーカスX線CT画像

らかにし、古墳・寺院出土例との比較を試みた。同時期の有力古墳出土品と比べると簡素である事は否めないものの、これは多くの寺院埋納例に共通する特徴であった。この点は飛鳥寺の建立に大きな影響を与えた百済の王興寺とも類似し、両者の関係性をうかがわせる。ただし皮革製袋鞘やヒノキと思われる針葉樹製鞘をとまなう刀子などからみて、これらの刀子が舍利とともに百済からもたらされたとまで考える必要はないだろう。飛鳥資料館では飛鳥寺塔心礎出土品の調査研究を順次行っており、今後も作業を進めたい。

本稿には一般財団法人佛教美術協会研究等助成金およびJSPS科研費26770276の成果の一部を含む。

(石橋・諫早)

註

- 1) 奈良国立文化財研究所『飛鳥寺』1958。
- 2) 既報告では資料5の柄縁装具を鉄製、資料3の柄を二枚合わせとするが、前者は木製、後者は一木造りであることを確認した。
- 3) 既報告で「鞘痕跡を見ないもの」とされたものの多くに皮革製鞘の痕跡と判断される有機質が付着している。
- 4) 渡邊可奈子「畿内における古墳時代の刀子—大和地方を中心に—」『古代学研究』185号、2010。
- 5) 渡辺康弘「古代刀子の拵について」『史観』第115冊、1986。
- 6) 藤村翔「金の刀子と銀の刀子—古墳時代後期における装飾刀子の展開と特質—」『立命館大学考古学論集 VI』2013。